



1 大部ヶ岩からの眺め。まち並みが一望できる / 2 夕暮れの遊水地はこはく色に染まる / 3 沿道に植えられた菜の花。黄色いじゅうたんは春の風物詩 / 4 金山棚田の田植え。「金山棚田を守る会」を中心に、古き良き原風景を守っている / 5, 6 林野に400種4万株のアジサイが咲く「みちのくあじさい園」。アジサイは工芸品の原料として利用されている / 7 2016年7月に市の無形民俗文化財に指定された「蓬田神楽」。庭元の蓬田稔さんを中心に、南部神楽の格式と伝統を守り続けている / 8 春と秋に行われる例祭。地元住民をはじめ、多くの神楽ファンが舞川を訪れる / 9 「舞草神社」は平安時代に編さんされた延喜式神名帳に、その名が記されている。日本刀の祖「舞草刀」と併せて、当時の朝廷から重要視されていた / 10 古くから神聖なものとして伝えられている巨石。その風貌から「屏風岩」と呼ばれている / 11 「水上の氏神様」は、1799(寛政11)年に奉納された。人々の心のよりどころだった / 12 地域づくりの拠点「舞川市民センター」に集まって遊ぶ子供たち

## 2 色とりどりの風景

特徴ある農業と魅惑の風景がベストマッチ

水害対策の遊水地  
大規模農業に生かす

1960年代中頃からの米余りへの対策として、国内では70年頃からコメの生産調整が続いている。農家に減反や転作を奨励し、援助を行う制度。現在は水田の面積に対して作付けできる面積と、転作してほしい面積が各農家に通知される。

「水田でコメ以外を作るのは難しい。転作は、農家にとって悩みの種」と話すのは農事組合法人「アグリパーク舞川」の小野正二代表理事。舞川地区には、水害対策として整備された遊水地がある。アグリパーク舞川が転作を一手に引き受け、大規模にムギを作付することで、舞川地区の農家は他地域に比べて、効率よく米を作付けすることができるのだ。



アグリパーク舞川  
代表理事  
小野正一さん

昔ながらの手作業  
古き良き原風景を守る

大小さまざまな形の水田が密集し、昔ながらの景観を残す「金山棚田」。江戸時代後期に開拓されたといわれ、約100枚の棚田は、中山間地の農業のシンボルとして注目されている。

水田の持ち主である金山孝喜さんは「約50年この棚田でコメを作ってきた。体の動く限りは続けたい」と笑みを浮かべる。

5月14日に行われた田植えは、地元有志でつくる「金山棚田を守る会」を中心に手作業で行われ、2時間ほどで苗を植え終えた。

同会の小岩章一会長は「積極的なPRで名所と呼ばれることも増えた。古き良き原風景を守りたい」と意気込んだ。



金山棚田を守る会  
会長  
小岩章一さん